



私の山

常任理事 大井 清

私の山をふり返る時、あの枕木を並べた土合駅のホームと、モルゲンロートに美しく輝く燕岳の朝そして朝モヤの静かに流れる幻想的な尾瀬が原、等を想い出す。何れも三十年近く前の事である。

戦争中は前橋から歩いて赤城へ登ったり、神津牧場へ友人と自転車で行ったりしていた程度だから山への興味はあったものの、中年以降これ程まで、たくさんの山の人と交友がもてるなど全く考えてもみなかった。

戦後家業のセトモノ屋にはなつたが、生米ソロバン勤定の苦しいクラブに求めた。はからずもこのクラブは我が前橋山岳会の生みの親なのである。グレンデスキーの華やかさにあきたりない若者が山スキーを更に厳しさを求めてクラブをとり出して行った。四十年も前の一事件ではあるが、当時の大先輩が、今ではかくしやくとして山登りを続けておられる便りをさくにつけ、心からお目出とうを申上げた。

さて二年近くお世話になったクラブではあったが初めからそのムードの肌にあわないものを感じていた私は前橋山岳会へ移った。自分

としては勇気のいる事だった。当時の前橋山岳会には、現沼田山岳会長の須田淑人、鵬翔OBの定方良輔、前橋水道場長、土岡松男、神保ホシタ社長、神保登等の若武者が、麻のザイルを肩にサッソウと谷川近辺へ通つていたのである。このザイルを肩にサッソウと谷川近辺へ通つていたのである。このザイルを肩にサッソウと谷川近辺へ通つていたのである。

なげなしの金をはたいて十二耗の三十米ザイルを求め、鬼の首でもとった様に一晩抱いて寝たものである。新しいザイルは固かった。これを先輩の言うなりに一晩風呂に浸すとグツグツとやわらかくなる。浸すとグツグツとやわらかくなる。浸すとグツグツとやわらかくなる。

さてザイルは求めたものの、先輩と同行するには少々練習不足、そこでアップザイルの練習場に目をつけたのが旧NHKの鉄塔である。三番目のテラス迄上るとダブルにして丁度よかった。夜間必死のおもいで訓練を始めたものの数日後にみつかった。この監督さん曰く「俺も山男だ

が公共物でこんな危険なことをしてもらうては困る。山男はもつと良識をもつて……」となしなめられ、くすぐったい思いで謝まったのも苦い思い出の一つである。このザイル何とか本番に使つてやろうと土合へ出かけるのだが、こゝでしばし当時の谷川スタイルなるものを紹介しておこう。

先づ帽子は田舎のおっさんがかぶり捨てた様な中折れに細引きを巻く。アクセサリなのである。上半身にはその便利さから必ずチョッキを着たがこれは親父の着古し。それも、そこにつぎはぎがなければらしくないのである。東京緑山岳会のオアニサンなどのそれは辛うじてそのおまけを留めている程度のチョッキでそれが、国鉄の列車の中で異様にみえなかったのだから、戦後の冷え切った経済をバックに、それなりのファツション性があったのだらう。足許は決まってすりへった下駄、それも女物、もう一つランクが上ると、片方づつ、違ったものを履いていたのだからすこった。

勿論山へ入れば草鞋になるのである。然しその頃でも「あっち（北アルプス）の方へ行くとなーゲル（鉄靴）で岩登りをするんだぜ

奴等は金持ちなんだよ……」などと語られた。やはりアルプスは遠かったのである。

二十五年夏北穂の稜線に友人を失ない、当時北穂小屋の小山兄弟に助まされながら上高地西条小屋迄三時間で連絡にかけ下りた事。始めての冬山の奥武蔵ではスキー隊より輪カンジキの方がはるかに先に下つてしまった。八ガ岳では風邪をおして手拭をマスクに張り、富士山では調子づいたグリセードが止まらず皆をひやりとさせた。奥利根では、厚さ二米近くのスノーブリツチが崩れ落ち、しなを再認識させられた。又東尾根の岩峰ではアイゼンが滑り、一ノ倉側へ転落、とつぎにマチガ側へとびこんだNのジツヘルで危く難を逃れたもの、その時の鎖骨と肋骨のヒビはその原因を女房には話せなかった。

山では隣の奴が命の恩人なのだ。恩人同志でザイルを組む。何時自分分が恩人になるか、又なられるか真剣なつきあいである。

「なに一人や二人……でも我々は登りますよ」と激しい斗志の若者と「登りたい、然し必ず帰つてきます」という妻子ある隊員と、その表現はさまぐくではあるが、それ〴〵山に対する情熱は激しくその気持はわかりすぎる程わかるのである。

シーンはその言葉と共に深く脳裏に焼きついて離れない。無事故を誇つた我が会もついに昨年十二月新雪の谷川岳シンセンに若者一人を失った。その捜索は岳連始まって以来の友情出援となり私達を感謝させた。夜中から明方にかけてく〴〵と集まってくれた山男達には本当に頭の下がる思いであつた。群馬岳連ここにあり、私はこの様な人達と一生登り、語り、飲みつづけたと思つてゐる。

常任理事会報告

九月十三日休協会館で、定例理事会が開かれ、諸報告の他、役務分担などがきまり、活動のレールがしかれました。

役務分担
理事長 石井謙一郎
副理事長 川辺 柳一

総務 大井、富山、柴田
企画 福島、須田、八木原

編集 伴田、高橋、笠原
国体 太田、大谷、水野

指導 原田、田中、高田
遭村 西山、加藤、長谷川

海外 小暮、岡部、村上
他に常任理事として、体育課長

観光課長が加わり、総人員二六名です。退任された諸氏には、大変御苦勞様でした。

他の議題として、遭村部より、山岳会及び指導員宛に連絡を行ないます。なお、岩登り講習会、氷雪技術講習会に参加する方は保険の加入を義務付けます。

岳連行事予定

秋田講習会
10月25日(木) 体協会館
26日(木) 体協会館

29日(日) 前橋市橋山
内容 読図の基本、オリエンテ

リングの実際、オリエンテリング大会と段階的に進み、最終日の大会では多数の参加を予定。

岩登り(人工壁)講習会
11月12日(日) 榛名山硯岩

内容 初心者から中級者を対象として用具の使用法、基本動作、脱出方法等の習得と訓練

登山実技講習会
11月18日(土) 桐女校庭(幕宮)

19日(日) 鳴神山 吾妻山
内容 登山の基礎として初心者

を対象に幕宮技術、生活技術、歩行技術の実技と登山の楽しさについて語り合う。

高層天気図講習会
11月下旬12月上旬 場所未定

内容 登山に必要な高層天気図について気象庁より講師を招いて、冬山を対象に行なう。

氷雪技術講習会
2月上旬 松木沢

内容 中級上級者を対象に冬山における登攀を主体に行う。時期については気象状況により決定する。

連絡、申し込みについて
講習会ごとに、指導員会から各

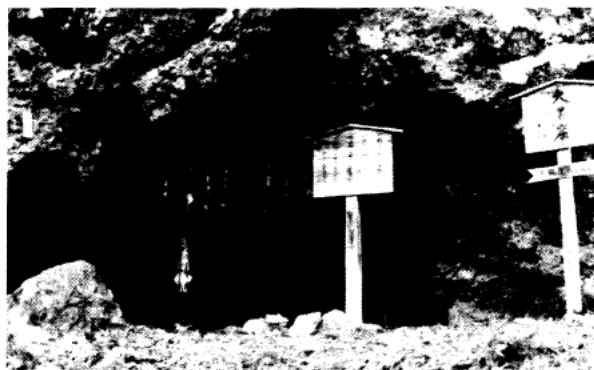
山岳会及び指導員宛に連絡を行ないます。なお、岩登り講習会、氷

雪技術講習会に参加する方は保険の加入を義務付けます。

講習会ごとに、指導員会から各山岳会及び指導員宛に連絡を行ないます。なお、岩登り講習会、氷雪技術講習会に参加する方は保険の加入を義務付けます。

川手山

国道十七号線を湯宿温泉で別れて十一、八キロ県道湯河原中条線に入って入須川上、山田屋前より県道と分れて右に入りまもなく林道大影―秋鹿線で奥に入ると舗装が切れ、一軒宿の奥平温泉がひっそりと静まりかえっている。林道は左側にカーブして尚も進むと(奥平温泉より二キロメートル)川手山森林公園入口に差しかかる。公園はここより一、八キロ右に入った標高一、〇〇〇メートルの位置にある。これより二、八キロ四万側に車をすすめると、右側に川手山聖園と書かれた看板が目に入ってくる。標高一、一六〇メートルの川手山は、古くから信仰の霊山として親しまれ特に行者洞にお



光り苔の大黒洞

いては、利根川月界法印が千日の修行をしたと云われる洞窟を始めとして、大小十二の岩穴があり、それぞれ石仏が安置されよき時代の信仰心のあつたと人々の敬虔な気持を、うかがう事が出来る、入口から二十分で最初の岩穴、弥勒菩薩穴として光り苔の生息する大黒洞に至る。光り苔の群生

＝ かくされた山 ⑩ ＝

川手山と平標山

新治山岳会

は、県内では最大であり、昭和四十八年八月二十一日県の天然記念物に指定されている。この様に十二の岩穴を廻りながら、山頂に出ると、ひと尾根西に四万温泉、そして北に上越の山々、東に赤城山などが望め附近一帯は石楠花が一面に群生し時折りキツツキの木をつつく音があたりの静けさの中に響いて聞こえる霊山である。山頂より尾根伝いに下つて二十分、大きな岩の石門山にさしかかる。自然のなせるわざとは云え素晴らしい造形だ。この下をぐりぬけて二十分、元登った入口に戻る事が出来る。所要時間二時間で林道に戻れる。四万温泉まで八、七キロ二十分、四万温泉へ出る事が出来る、かくされた名山である。

平標山

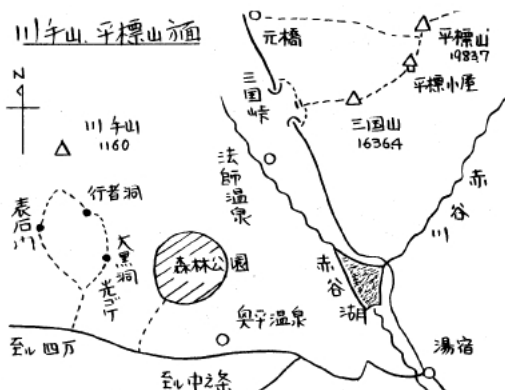
平標山は数々の遺蹟を有し、大切な水源にもなり、赤谷川の源流ととも(五月初旬より)高山植物が咲きほころび、上越国境でも一番の高山植物の多い山である。平標山頂への登山コースは、国道十七号線三三三トンネル口より入るコース三三三トンネル口―大源太山―平標小舎―平標山頂のコースは上信越自然歩道が平標小舎まで延びていて道標も完備されていて誰でも歩き易い道である。途中三三三トンネル現様、お花畑を通り六五キロ、四時間の行程である。平標小舎は昭和二十五年十一月木造平屋建てで完成をみてから、本年で二十八年の才月が流れ、老朽もはなはだしくなった。ために急避難は出来るようにしてある。

近ごろ利用者のマナーが非常に悪くオーブンの際掃除に登るのであるが、同志としてマナーに充分気を付けて公共の施設であると云う認識をもつて利用して戴き度いと願うものであります。以上新治山の二つの山を簡単に紹介致しましたがいづれも整備が十分であり是非一度訪れて戴き度い山であります。

新治山岳会 紹介
会の発足昭和二十八年
会員数 六〇名
事務所 新治村役場経済観光課
TEL 〇二六 四一〇一一
会長 岡村 隆造

我が会は人口九、〇〇〇人の村内在住の山好きな同志の集まりであり、山持ち山岳会として、コース整備、遭難活動等を行って居る会であり、高度の岩登り技術は持っていないが山歩きは相当達者な仲間が多く居る会である。村民ハイキング大会も今年で一九九年を数え、愛される会を目ざして仲間づくりをすすめて居る。弱小山岳会でありますので、数々の御指導を戴き度いと存じます。

かくされた山 原稿募集
かくされた山の企画も十回になりました。あまり有名でなくともひっそりと静かな山歩きが出来たり、練習用のグレンダとして思われぬ良い場所があったり。そんな山の紹介と合わせて、自分達の山岳会のプロフィールをまとめて、写真一枚、概念図一枚をまとめて、編集子まで送って下さい。



山道を二、六キロ登ると平標小舎前広場に達する。急なコースであるが、国道が二時間、平標小舎まで登る事、一年中濁れたことのない水源であり、この水の一杯は、短コースである。味わった人は、一生忘れ難い水である。小舎の管理人は、新治山岳会理事でもある山口貞氏が、小舎設立と同時に、管理人として入って、六年前より、山口氏の二男正勝氏が父と共に管理に当たっており、ヒゲの若おじさんで登山者にしなわけていて、たのもし

ダウラからの手紙

D・I峰遠征隊

前略、一日に出発以来、通信方法がなく、御心配をおかけしていることと思います。一八日にB・Cに到着しました。これまでの経過を取り急ぎお知らせいたします。

8・11 ポカリーヤンザ 二〇〇人近くのポーターは、順調に集って出発。なかには女性のポーターや、子供連れの夫婦のポーターもありました。一才位の子供が母親の背負った荷の上に乗って一諸に來たりしています。町はずれまではポーター自身でバスをチャーターして、全員バスで行ったようです。

8・12 ヤンザノウタウカール ノータラに登る坂の途中で後手にしはれた村の人に会う。きけば誰れ彼れとなく喧嘩をふっかけあはれる由。数日前子供をなくして不眠だということで、関が投薬カールの近くで夕方となり、ついに殆んど全員が蛙の洗いをうけました。連絡官タバ氏も隊員とうちとけてきているようです。とくに隊長とは、飲み友達みたいになつて仲良くやっております。

8・13 カレーチャンドラコック トービレンチンスタメ カールからもデココラの河原まで一気に下るとビレンチンです。

ここから昨年の偵察の時のようにブルグンディコロラの河原沿いの道が通れず、高巻きの道を行きました。すこい登りで、途中二時頃から夕立がすく、二時間も続き、暗くなつても到着出来ないポーターもありました。予定のティルゲンガに行けず、少し手前のスタメの学校に泊めてもらいました。

8・14 スタメーティルゲンガ ウレリーゴレバニ 五人程のポーターがやめると言い出し、何人かが前渡金をうけとって、五分程荷物をかついでから放り出して逃げて行つてしまつた。ポーター集めのため、セカン・サーターのバスとナイケ一人とシエル一人を残して本隊は先行。ティルゲンガからウレリまでは、きつい登り。ゴレバニまでは針葉樹の茂つたうすぐらい森の中の道です。雨でも降れば蛙がすこつたでしようが、幸い雨にも降られず通過できました。

8・15 ゴレバニシーカート バニ この日も二〇人以上のポーターがやめると言い出し、結局十個以上の荷物が残つてしまい、八木原・真下をここに残してポーターを集め、スタメの五〇人と合流して後を追つてもらうことにする。賃上げもさせられ、21・23ルビーになり、シカからタトバニまでは長い長い下り。タトバニは適当なキャンプサイトがなく、全員ロッジに泊る。

8・16 タトバニ・ダナリガサ ダナから左岸に移り、カリガンダキの両岸がぐつと狭くなるとガサ。家々の屋根も平らになり、町はずれの門には、ラマ教のマニ車が見られ、いよいよチベット近しい感じになってきましたが、日中晴れていますが、山には雲がかかり、かんじんのダウラギリはみえません。

8・17 ガサ・カロバニ 非常に近い距離ですが、他によい場所がなく、カロバニ泊。夕方ツクチェビクがみえましたが、やはりダウラギリはみえず。先発隊と三時と五時にトランシーバーで交信が出来、一安心でした。

8・18 カロバニ・B・C カロバニから一時間程河原を行き、左手の草付きの尾根をどんと登つてB・Cにつきました。花のきれいな夏の放牧地です。B・Cの高さは三九五〇mなので、高度障害も心配しましたが、あまりにいいところはなかった様です。

8・19 この一二日、福田・石川が下痢で心配しましたが、回復しつつあります。今日の雨の中での登りのせいか、阿久沢・阿部、関が発熱しましたが、関は良くなつてこれを書いています。他の隊員はキャンプの整理をしています。スタメからの荷物も何個か、午后につきました。手紙などの連絡がなく、ただポーターだけの到着ですが、八木原たちもじきにづくと思えます。

8・22 八木原・真下がB・Cに到着。全員そろいました。宮崎・深沢・山田はC1予定地に到着。他の隊員もほぼ元気でおります。とり急ぎお知らせします。その後の行動をお知らせいたします。

8・24・25 高度順化のため、南東稜のC1(昨年偵察の際の越え)へ遠足にいったり、C1へ荷上げしたりです。C1へ移動。

8・25 最後の荷物がバサンサードとともにB・C着。

8・26 C1建設(4600m) ベース正面の小尾根を登り、東ダウラギリ氷河の末端に取りつきました。大体アイスホール末端で懸崖ですが、うまい平な箇所をみつめて簡単に氷河上に上りました。

8・29 阿部が順化悪く、カロバニ(2500m)まで隊長と一緒に下らせる。(9・2BCに復帰)

8・30 C2建設(5150m) 南東稜から東に派出している顕著な支尾根に取りつき、雪のガリー泥まじりの岩場を登つて大きな針峰の基部にC2建設。

9・3 B・Cから荷上の荷物が殆どなくなり、シエル3名を残して他はC1へ移動。

9・4 南東稜主稜線上にC3建設(5600m) 関 章司

第三十三回国民体育大会 山岳競技関東地区予選会報告

国体県予選会で選抜された成年女子・少年男子及び少年女子チームは、七月十五日・十六日に茨城県日立市の北西に位置する神峰・高鈴山群で関東地区予選会が実施されました。各種別とも関東地区割当数は三チームと決まり、成年女子は、栃木・群馬・埼玉・千葉・茨城の五県。少年男子は、栃木・群馬・千葉・東京・山梨・茨城の六県。少年女子は、栃木・群馬・山梨・茨城の五県が参加した。七月十五日の競技種目は、国体本番への出場権を競い、成年女子は縦走登山と踏査競技を同時に組み合わせた方式で、日立市神峰公園をスタートして鞍掛山か

山の好きな男のセトモノ店

お・大・井

県庁通り 前橋ビル ☎0272-21-1678(代)
卸部 前橋市間屋町 ☎0272-51-1000(代)

冬山用品・スキー用品

大 特 売 中

山とスキーの店 石 井

伊勢崎市中央町18番8号
T E L 0270-25-0272

岳界通信

岳連講習会の報告

岳連主催による登山技術講習会は、登山技術の基礎及び広い知識と技術を習得することを目的としていますが、各山岳会を始め、初心者にとっては横のつながりを広げるよき交流の場となっており、今後共多数の参加を期待しています。

春山技術講習会

日時 6月4日
場所 谷川土合

実践的な雪上技術の習得とリーダーの養成を目的としてカリキュラムを作成したが、雨天のため実技を中止して、旧指導センターで約二時間の机上講習を行なった。基本姿勢や用具の用い方では指導員が床上で行い留意点を指摘し研究課題としては、雪上での連続登攀についていろいろな方法を取り上げた。

参加者は群馬むすびの会、中之条山の会、群馬登山会、その他で18名、参加した指導員は次の通り
村上泰賢(倉淵山岳会)
下平正弘()
塚越寛()
大沢博(群馬独峰会)
高田政美(群馬登山会)
外所桂一(群馬むすびの会)
岡安茂能(高体連)

実践的救急法

日時 7月9日 13時~15時
場所 体協会館(前橋)

山でのアクシデントに即応出来る応急処置について、止血法、骨折ねんごの手当て、三角巾バンデーストッキングの活用、他について谷川岳指導センター剣持勝美指導員により講習を行なった。応急処置の大切なこと、注意すべき事項を体験をもとに具体的に講義が進められ、白毛門における酸素欠乏症による死亡例など、最近の登山医学に関する報告も目新しい情報として提供された。つづいて三角巾の用い方としてグループ毎に実技を行い、今年、日赤救急指導員の資格を取得した加藤指導員も加わり、充実した講習会となった。バンデーストッキングの応用による講習はすでに何回か行なわれたが、今回の講習会参加者はほとんど初めてで熱心な余り、終了時間を越えての講習会となった。

参加者は一般17名、指導員研修修6名であった。

救助隊夏季訓練

去る七月二日、谷川岳山開きの日に合せた恒例の救助隊夏季訓練を、本格的な夏山シーズンに前にして、西山隊長以下十七名の隊員が参加した。

練を行うことが出来た。場所は一合沢二の沢出合付近及び中央稜テールリッジを利用して、デイスクアレキ・ウインチ等を利用しての訓練を行った。参加隊員を二班に分けて、特に新人隊員、中堅隊員を中心として、基礎技術としてのデイスクアレキによる吊り上げ、ウインチを使用したのり上げ、ウインチの技術の重点に行なった。又、大切なこととして、それら器具のセット方法(支点の取り方・シユリング・ボルトの位置・角度・強度)に関し、しつこい程度勉強した。

中堅隊員の応用技術としては、従来行ってきたワイヤーを張り込んで行うチロリアンを、もう一歩進めた技術の救出訓練を行ったがこれは本番さながらの熱の入ったものであった。まだ不慣れな点があったことも否めないが次への大きなステップとして、実のある応用技術訓練であった。

ヒマラヤ登山隊 壮行会より (文責 小泉俊夫)

ヒマラヤ登山隊 壮行会より

暑い夏をむかえ、七月一六日(日)前橋市大友町の問屋町会館において一四〇名近い出席を得て、午後一時すぎ開会されました。始めに、今隊の隊長を務める田中成幸氏より隊員の紹介、続いて上毛新聞社を初め、今回の遠征にあたりご協力を賜った各企業代表者の方々の挨拶。壮行会も一段と盛大となつてまいり、また、浜名一雄岳連会長の熱の入った挨拶もあつて、盛りあがりも一層増してきました。

物品販売残品整理

についてのお願い

ヒマラヤ遠征に際しての物品販売に協力していただきありがとうございます。ネパールバック・マグカップ、及び山の本については皆さんの御協力で、かなりの量がさばりました。遠征隊出発後の残務整理として、早くケリをつけたらと思います。それぞれの会や個人で、あつた物品と残品を整理して、集金された金額と共に左記へ納めて下さい。

- 前橋市大手町二丁目七十一 0272(2)一六七八
- 0272(5)一〇〇〇
- ネパールバック 高橋清あて 前橋市上泉町九六六一 0272(6)一六三三(夜)
- 山の本 諏訪ふさあて 佐波郡東村国定一八二二 0270(6)一〇二〇〇(夜)

国体山岳競技地区別審判員研修会

昭和五十三年度の地区別審判員研修会が、九月九日・十日の両日に渡って栃木県山岳連盟の主管に、今市市にある日光東照宮会館で開催されました。本県からは、次の指導員が参加し、山岳競技規則、採点要綱を勉強しました。

←(前ページよりの続き)
以上とし、スタートとゴール地点の二カ所で計測があり、ゴール地点で規定重量がなければならぬ。又、テントは家型の指定があつた。天気図の審査は今回は実施しなかった。

本年度の国体から新たな種目となった登山競技について、予選会で実施した内容について記してみたい。登山距離は四十メートルで三人が一バリエーとなる。隔時登山し、途中一カ所でザイルピッチを切り、登攀後は二十メートルの懸垂下降で終了となる。審査は、登攀のバランス・確保姿勢、自己確保・カラビナのかけ方、懸垂下降のザイルのセット・下降姿勢といった登攀の基礎となることが重点となり、アンザイレンから登攀、懸垂下降からザイルの回収後ザイルを巻き終るまでのタイムの計測が主な対象となった。登攀ルートは、下部が急なリッジ上部はフェースとなり、ルート中に三カ所にボルトが二本横に並べ打たれていて、二本のボルトにテープが結ばれていて、そして他チームの登攀の様子が見られない場所を装着して順番待ち、取付点案内された後、簡単なルート説明を受けて登山開始となる。下部はリッジのために自然とルートは決まるが、上部フェースは二本のザイルが下げられた中であればルートファンディングは自由とのことだ。

登攀中審判員が、間違つたカラビナのかけ方や自己確保をしなかつた場合に、ストップを命じて正しい方法を指摘した。(この指摘は減点となる。)懸垂下降は、ザイルを落す目標点を設置し、下降器具を使用することはできない。審判員の講評については、縦走競技については体力不足が目立ったこと。基礎体力トレーニングを必要とすること。踏査競技は、時間がかかりすぎたこと。これは体力と読図力不足で、現在地点の確認方法の研究と行動記録についての自然現象・四開の観察を要領よくまとめること。登山競技は、岩場(高度)に慣れること。正しい確保(自己確保も含む)。三点確保。カラビナのかけ方、特にかけ替え、連絡指示の仕方。などがあげられた。

予選結果、関東地区代表は次のとおりです。

- 成年女子 一位茨城 二位栃木 三位群馬 少年男子 一位茨城 二位群馬 三位栃木 少年女子 一位栃木 二位茨城 三位山梨

編集後記

むしあつく長い夏も過ぎ、高い山に初雪の便りの聞かれる昨今です。このネロが皆さんの手もとに届くころには、ヒマラヤからの吉報が届くでしょう。

「なれない編集会議」も、最近ではいく分なれてきた感じがします。配布に手間がかかるので、資料の価値も考えています。編集子は若干変わり、次の人達がメンバーです。

太田忠行・女屋等志・笠原伊勢雄・倅田正也・川辺柳一・諏訪ふさ江・高田政美・高橋啓太郎